

令和 3 年 5 月 17 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02803

研究課題名(和文)慢性疾患学生を支える保健管理部門コーディネーターのあり方と人材育成プログラム開発

研究課題名(英文) Approaches to University Health Service Coordinators and Development of Human Resource Development Programs to Support Students with Chronic Illnesses

研究代表者

河合 洋子 (KAWAI, Yoko)

日本福祉大学・看護学部・教授

研究者番号：10249344

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、慢性疾患の学生が大学生活を円滑に送るための保健管理部門の看護職者の育成である。保健管理部門での慢性疾患学生支援の実態調査で、慢性疾患学生は95.9%存在し、主な病名はてんかん、糖尿病等であった。学生対応で困ったことは、様々な状況の学生の対応が不安、緊急時対応、他部門との情報共有の方法等であった。てんかんをテーマにした研修会では、参加者の満足度は高く、継続した研修会の必要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究では、大学の保健管理部門の看護職者が慢性疾患の学生への対応や支援、大学内での連絡体制で困ったことや対応に苦慮していることが明らかになった。第1回研修会には全国から参加しており、慢性疾患の新しい知識や学生対応の検討の機会を求めていることも明らかになった。慢性疾患学生が安心して大学生活を送るためには保健管理部門の看護職者の存在が重要であり、それを支えることは社会的な意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to cultivate of nurses who belong with university health services in order to make life easier for students with chronic illnesses. We conducted a fact-finding survey of university health departments and found that 95.9% of students had chronic illness. The most frequently mentioned chronic illnesses were epilepsy and diabetes. The survey highlighted various problems related to providing student support, including lack of confidence of the nurses about providing student support in different situations; providing support in an emergency; and methods of sharing information with other departments. The participants of the study were highly satisfied with a training session on the topic of epilepsy, indicating the need for further training sessions in the future.

研究分野：生涯発達看護学 特別支援教育

キーワード：慢性疾患学生 保健管理部門 看護職者 学生支援 コーディネーター 特別支援教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

障害学生の在籍の増加，中でも病弱・虚弱の学生の割合は急増しており，複雑化する慢性疾患学生への対応は困難が予測される。2015 年度に申請者らが実施した看護系大学の慢性疾患学生の支援に関する質問紙調査では，約 6 割に学生支援担当部署が設置されており，1 名以上の慢性疾患学生は約 7 割であった。実習を伴う科目においては実習を行う学生だけでなく，その教育に携わる教員，特に医療の知識がない場合は，保健管理部門の存在が大きい。大学の保健管理部門では医療の知識を持つ看護師・保健師が配置されていて学生の保健管理を担っている。そこで，実習を受ける学生，それを支える教職員との調整など，保健管理部門の中でのコーディネートできる人材の育成は重要である。

2. 研究の目的

この研究は，大学の学生支援体制において，慢性疾患の学生が実習を円滑に進めることができるための保健管理部門における効果的なコーディネートのあり方について検討することであり，保健管理の面から支える人材（特に看護師）の育成をすることである。

3. 研究の方法

(1) 慢性疾患の大学生の学生生活に関する調査

慢性疾患に罹患しながら大学生生活を送っている学生（以下，慢性疾患学生）に対する保健管理部門における支援の状況を知る目的で，2018 年 11 月，全国の大学 759 校を対象に郵送法による自記式質問紙調査を実施した。質問内容は，大学の背景，在籍する慢性疾患学生の状況，平日や時間外での対応事例，大学・保健管理部門での活動や体制，慢性疾患学生支援で困難なこと等である。

(2) 慢性疾患学生を支えるシンポジウム

慢性疾患学生の大学生生活を捉え，支援のあり方について考えることを目的に，2020 年 1 月 25 日（土）に日本福祉大学東海キャンパスでシンポジウムを開催した。講演 1：当事者 2 名による「慢性疾患学生が経験した『大学生生活あるある』」，講演 2：患者・家族の会の方による「本人や親からの相談，活動の課題について」，講演 3：移行期支援外来看護師による「小児がん経験者の移行期支援から見えてくる課題」，全体討論で構成した。

(3) 第 1 回 大学保健管理部門マネジメントセミナー研修会

大学の保健管理部門で慢性疾患学生に対応している看護職および他の職種の方が自信をもって対応できることを目的に，2021 年 2 月 20 日（土）にオンラインによる研修会を実施した。研修会の案内は，2018 年度アンケート調査依頼をした 759 校に郵送した。第 1 部は医師による講演「てんかんに関する最近の知識」，第 2 部は「てんかんの学生の対応～成功・失敗事例から学ぶ～」と題してグループワークを実施した。

4. 研究成果

(1) 慢性疾患の大学生の学生生活に関する調査

266 校から回答を得た（有効回答率 35%）。大学の背景は，国立 31 校，公立 40 校，私立 95 校，学部は 2，3 学部が 38.7%，次に 1 学部が 32.3%であった。学生数は，1,000～1,999 人 22.6%，500～999 人 20.3%の順に多く，実習のある学部は，教育実習 76.3%，福祉系実習 50.4%，看護学実習 31.2%等であった。慢性疾患学生が在籍する大学は 95.9%で，多くが新学期の健康診断で把握していた。慢性疾患学生数は，10 人未満が 24.8%，10～19 人 19.2%で，主な病名は，てんかん，糖尿病，甲状腺機能亢進症，大腸疾患等であった。保健管理部門で対応した事例は，てんかん発作，過換気症，低血糖・高血糖症状，意識消失など突然起こる症状が多かった。慢性疾患学

生の対応で困難なことは、様々な症状の学生がいた場合の緊急時の対応が不安である、学生の情報をどこまで共有するか、本人・家族が伝えたくないときにどうするか、急に発作等の症状が起こった時の緊急体制について、一人暮らしや留学生に対する対策についてなどであった。ほとんどの大学に慢性疾患学生が在籍しているが、実際に対応している保健管理部門では対応策に苦慮していることが分かった。分析を深めるとともに、支援を受けている学生についても調査の必要がある。

表 学生への対応・支援で困ったこと

n=89 (112件)

カテゴリー	サブカテゴリー
自己申告のない学生の状態把握と対応が困難	自己申告してこない学生の把握が難しい
	自己申告がないと対応が遅れる
種々の状況の学生の対応が不安	緊急時の対応には常に緊張感を伴う
	知識不足でアドバイスができない
	経済的な事情で受診しないなどどこまで保護者に介入するか難しい
	情報開示したくない学生への対応が困る
本人・家族の意識が低く、対応が困難	本人・家族の病識が低く症状を起こした時の対応に困る
	本人・保護者への実習や就職に関する説明や対応が難しい。
	本人・保護者と大学の意向とのズレがあり調整が難しい
ひとり暮らしの学生の生活面を含めた対応が困難	一人暮らしの学生の対応が困難
	留学生の対応 自立した支援が必要
学生生活の支援が困難	難治性の病気について
	精神疾患発病やメンタル面の支援が必要
	単位がとれなくて体調悪化し、留年、退学する学生がいる
診断書の扱いに戸惑う	健康診断証明書にどこまで記載すべきなのか迷う
	診断書に記載して欲しくないと言われた時の対応が難しい
	健康診断で異常を発見した場合の対応
	診断書提出の必要性の是非に迷う
学内での情報共有等の管理体制が整備されていないこと	情報が本人の同意に左右される
	個人情報の共有が困難
	教員間の情報共有と対応が困難
	学外実習中の対応で情報の共有が難しい
	保護者・主治医・他部署等の連携困難
	他部門からの情報が提供されないので、動けない
大学側に対応のための支援体制が整備されていないこと	周囲の学生との関わり方
	学校側が対応する意向を持たない。
	支援する手立てが大学側にない。 支援のマニュアル化がされていない
緊急時の医療機関との連携が困難	医師等の緊急対応が難しい
	憎悪期に対応できる医療機関がない
	紹介病医院に悩むことが多い

(2) 慢性疾患学生を支えるシンポジウム

講演1では、中学生で発症した当事者1は、学校生活において治療による感染症対策の工夫として通学時に朝の電車を早くしたり、急な欠席に備えるため外来受診の曜日や時間の検討、実習中の健康管理について話した。在学中に発症した当事者2は、単位取得や実習との両立ができるかが不安だった。病気のことは実習中グループメンバーへ伝えたが、他のクラスメートに伝えることはとても勇気が必要だった。講演2では、患者・家族から「どういう大学へ行ったらよいか」「就職はどんな職種がよいか」など、患者自身が選択に迫られた時期での相談を受けた。学業や仕事を病気・治療との両立のためには、自分の病気の説明のしかたなど、自立をどう支援するかが大切である。講演3では、治療と就労の両立、異性パートナーと共に相談に来るなど、小児期から成人期へ移行するにあたり相談内容が変わってくる。親による健康管理から子による自己管理への移行のためには、親子関係の自立が重要である。全体討論では、当事者から大学生活での困難なことや頑張った工夫を聞いたことが慢性疾患の方を支える一歩につながったなどの意見があり、大学生という移行期の支援について参加者各自で考える機会となった。

(3) 第1回 大学保健管理部門マネジメントセミナー研修会

全国から93名の参加があった。講演内容は、てんかんの概要、発作型分類、青年期に発症するてんかん、治療法、発作時の対応など、新しい知識から日常的な対応などであった。第2部のグループワーク(34名参加)では、てんかんの学生の把握と健康調査票の活用について、社会的な偏見と診断・公表など具体的なことがテーマに挙げられた。課題として、自己申請した学生の症状の聞き取り方、教職員や他学生への病気・症状を伝え方、本人が申請しやすいアプローチなどサポート体制づくりが挙げられた。

研修会後のアンケートから、研修会の満足度は「やや満足」を合わせて全員が満足であった。参加の動機は、てんかんの知識や対応を学びたいが最も多く、他大学と情報共有したい、テーマに興味があった、経験が少ないため、Zoom(オンライン)での開催だから、などであった。希望する講演会・グループワークのテーマは、他の慢性疾患学生への対応、学生の情報共有についてなどさまざまであった。開催方法は、全国どこからも参加しやすいオンライン研修会が多かった。研修会への要望は、タイムリーなテーマ、他大学との交流・情報交換、継続して研修会を開催してほしいなどであった。課題として、初めてオンライン研修に参加する人への配慮、グループワークのメンバーの分け方の検討が挙げられた。保健管理部門の看護職者のニーズを把握したうえで研修会を催したが、研修会の内容やテーマは適切であったことが分かった。今後も継続して研修会を行うことの重要性が示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 河合洋子・大見サキエ・高橋薫・今城昌美・津田聡子・滝川国芳	4. 巻 57(1)
2. 論文標題 慢性疾患学生に対する保健管理部門と 学部・学科との連携について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 379-380
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 河合洋子・大見サキエ・今城昌美・高橋薫・津田聡子・滝川国芳
2. 発表標題 慢性疾患学生の支援体制の実態 ～保健管理部門の対応～
3. 学会等名 全国高等教育障害学生支援協議会 第5回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河合洋子・大見サキエ・高橋薫・今城昌美・津田聡子・滝川国芳
2. 発表標題 慢性疾患学生に対する保健管理部門と 学部・学科との連携について
3. 学会等名 全国大学保健管理協会 第57回 全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoko Kawai, Satoko Tsuda, Sakie Ohmi, Tomomi Gouda
2. 発表標題 Analysis of the Activities of the Health Support Center for the University Students with Chronic Diseases
3. 学会等名 2020 Taiwan International Nursing Conference by ICN (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河合洋子・合田友美・大見サキエ・津田聡子
2. 発表標題 大学の保健管理部門で多く見られる慢性疾患学生への対応事例から考える支援の課題
3. 学会等名 日本小児看護学会 第30回学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大見 サキエ (OHMI Sakie) (40329826)	椛山女学園大学・看護学部・教授 (33906)	
研究分担者	津田 聡子 (TSUDA Satoko) (20616122)	聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授 (33804)	
研究分担者	滝川 国芳 (TAKIGAWA Kuniyoshi) (00443333)	京都女子大学・発達教育学部・教授 (34305)	
研究分担者	合田 友美 (GOUDA Tomomi) (20342298)	宝塚大学・看護学部・教授 (34520)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------